

境港市校区審議会（平成29年度 第2回）議事録

日 時 平成29年6月22日（木）

場 所 境港市役所 第1会議室

委員 出席者 古都 好治、足立 ひと美、角 徹、山岡 睦美、肥後 功一、  
築谷 直人、徳永 哲郎、岩本 和貴、山根、真樹、  
竹藤 明美、神波 雄一、三瀬 ゆかり  
欠席者 永井 高幸、木村 一也、白井 靖二  
事務局 出席者 教育長 松本 敏浩、 参事 川端 豊、  
局長（兼教育総務課長） 藤川 順一、  
学校教育課長 影本 純、 学校教育課長補佐 高濱禎彦  
学校教育課長補佐 門脇 克美、学校教育課主幹 築谷健作  
学校教育課コミュニティ・スクール推進員 松田 寛彦  
傍聴者 3人

1 開 会 午後4時

（会長） それでは、まだお見えでない方もおられますが、定刻を過ぎましたので開催いたします。

2 会長あいさつ

（会長） 一言だけ、ご挨拶したいと思います。皆さんお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。今日の昼過ぎに、誠道小学校のホームページを見させていただきましたが、今日は5年生が校外学習に一泊二日で行っているということが出ていました。「元気でさわやかに、男組の出発です」と載っていましたが、どういう意味かと思っていましたが、5年生11人はみんな男の子でした。また、6年生は8人が女の子で、男の子は1人だけということでした。

6月5日の一斉公開日に行かれた方もおありと思いますが、私は行くことができなくて申し訳なくて、「ホームページくらいは…」と思い、いつも見させていただくことにしております。今日の資料の中に、保護者の皆さんの思いも書かれてありましたし、そのことを重く受け止めながら、一つの小学校の将来について話をしていくのは気の重たいことではあるのですが、でも子ども達にとっては、あっという間に過ぎてしまう小学校の時間が、大事な人生の出発点ということになりますから、やはり大切な問題を議論していると思います。鳥取県に様々な小さな小学校の問題はありまして、先週も関わったのですが、5人の一年生の日野郡の小学校とその隣の小学校も5人の一年生で、足すと10人ですけれども、5人と5人の小学校区に分かれています。小学校までは一緒に保育所で、中学校になるとまた10人が一緒になります。そういった中で地域に一つしかない小学校が「なくなってしまうが、どうしようか」というときに、幼保小中一貫で義務教育学校化を目指すという形の所が鳥取市にはあります。さまざまな教育の新しい試みが、学習指導要領の改定に伴って進められているところです。

何が一番いいかということは、非常に難しい議論になるのですが、皆さんの忌憚のないところを短い時間ですが、子ども達にも納得いくような議論ができればと思います。どうぞ、ご協力をよろしくお願ひしたいと思います。

### 3 概要説明

(会長) そうしましたら、配付されている第2回の資料について、今日は主に誠道小学校の現在の状況ということについて、子どもの数、教育の取組、全国学力・学習状況調査や学習の評価、先生方のアンケート、保護者の方の気持ち、そのようなものが資料になっています。それでは、事務局から要点を少しお話していただこうと思います。

(事務局) 資料の発送がぎりぎりになりまして、大変ご迷惑をお掛けしました。時間のない中で、見ていただくことになったかと思えます。なるべく早くに発送したいと思っております。

本日の資料ですが、1～3ページは主に教育委員会事務局が学校に訪問して感じたことなどをまとめたものです。4・5ページは全国学力・学習状況調査（以下「学テ」）の平成24年から載せています。6ページは学テの質問紙について、7～9ページは教職員へのアンケートを実施した結果です。10～12ページまではPTAが自主的に実施された保護者へのアンケートの結果を載せさせていただきました。

4ページからの学テについて、簡単に説明したいと思います。学テにつきまして、一番黒い棒グラフが誠道小の結果になります。国語も算数も、ここ2年くらいの間には若干全国平均を下回っているという状況があります。年度ごとに違うところもあるので、必ずしも一定の傾向があるというわけではありません。ただ、誠道小学校は受検した児童数が少ないので、結果は個々の児童の習熟度に左右されてしまうところがあると思っております。このあたりは十分にくみ取っていただけたらと思います。それから、「家庭学習に時間はどうであったか」を見てみましたが、毎日宿題はしています。ですが、1時間から2時間を超えない間の時間でやっているという感じです。決して家庭学習をしていないというわけではないのですが、2時間を超えるような学習はしていないというところですね。自主学習をやっている児童というのは少ないということが見て取れました。

6ページからにつきましては、学テの質問紙の結果ですが、特に学級規模に関係するのではないかという質問を選んで、ここ2年間（平成27～28年度）のデータを載せております。

(a)(b)については、前向きな子どもが多いと思われそうです。ですが、(c)のデータではやや自尊心が低目ではないかなと思います。(d)(e)の「学校に行くのが楽しい」「みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことはありますか」については、全体的に肯定的な意見が多いので、学校生活に対する満足度は高いのではないかと思います。(f)(g)(h)については、授業中の学び方等についての分析ができると思います。「5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか」「5年生までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができましたか」の答えについては、これも肯定的な意見が多かったように思います。人数は少ないながらも自分の意見を発表したり友達と話し合ったりして、問題解決をするという様子が見えています。(i)の「授業の中でわからないことがあったら、どうすることが多いですか」については「先生に尋ねる」というのが一番多いです。人数が少ないので一概には比べられませんけども、その場で先生に尋ねるとするのは全国は16.1%、県は14.5%ですから、40%以上ということで教師への依存が高いのかもしれないですね。ある意味、教師との関係はいいと思うのですが、割と先生に頼っているところがあるということかもしれません。

7ページからの教職員へのアンケートについてです。国語・算数・社会・理科・外国語活動

の教科と実技教科の指導において分けて答えてもらいました。項目については、「少人数であることの良さ」「少人数であることによる課題」「工夫していること」について尋ねました。国語等の指導につきましては、「良さ」については「個々の特性がわかり指導ができる」という個別の対応ができるということが多かったです。「学習の理解度を把握しやすい」「発言の機会が多い」などの良さを感じておられます。逆に「課題」としては、やはり「多様な考えが出にくい」という意見がありました。また「教師がすぐに対応できる距離にいますので、『どうすればいい?』という言葉が先に出てしまって、自己解決というところに向かいにくい」という意見も出ています。「工夫している」こととしては、「ペア学習やグループを活用している」「ホワイトボードを活用している」「タブレットを使っている」というのがありました。実技教科につきましては、「良さ」については「丁寧に指導ができるので、技能が定着しやすい」「個々の能力に的確に判断してアドバイスしやすい」「ミシンなどの機器を一人一台使用できる」というのもありました。「課題」として感じられているところは、「競争するという部分が少ない」「音楽においては、合奏の時に楽器が限られてしまう」、体育では「多人数でのゲームができない」などで、実技教科での課題を感じているというのが多いようです。「工夫」では、「2学年を合同で活動している」ということがあります。

8ページ目ですが、道徳・学級活動においては、「良さ」は「全員が自分の思いを表現できる」「お互いの考えを伝えやすい」という良さをあげています。「課題」としては、「多様な考えに触れにくい」などの課題が出ています。「工夫」としては、「担任も積極的に関わってアイデアを出す」ということをされています。生活科・総合的な学習の時間については、「個別の対応がしやすい」「話し合いの設定がしやすい」というところが多いです。「課題」は、やはり「多様な考え方を導き出せない時もある」という意見が出ています。学級行事においては、「良さ」としては「一人ひとりが責任感をもつ役割分担ができる」「一人ひとりの活躍の場面の確保ができて」「一人ひとりの存在感が大きい」という良さが上がっています。「課題」としては、「連合陸上や連合水泳などの体育的行事では人数が少なく大変」という意見があります。学級経営につきましては、「良さ」については「一人ひとりの係活動等、責任感をもって自分の役割を果たそうとする場面設定がしやすい」「個人が輝く時間を設定しやすい」というような良さを感じておられます。「課題」については、「人間関係が固定化したときに、子どもの逃げ場として難しさがある」「人間関係の固定化があると、トラブルの解決が難しい」と感じておられます。「工夫」としては、「お互いの良さを知る活動や全員遊びを取り入れる」「教師と子ども一人ひとりではなく、子ども同士の関係の集団づくりを意識する」というものが挙げられています。その他、学校生活全般については、「良さ」としては「異学年の交流が積極的に行われている」というのがあります。「課題」としては「自分の気持ちを言葉で伝えなくても、周囲の人に伝わるようになるので、表現力というところが課題」「児童が待ちの姿勢」というところがあるようです。なるべく、手や口を出さないという指導側の意識があるようです。将来の誠道小学校のあり方については、「他の校区からの児童を受け入れてはどうか」という意見がありました。非常に率直に答えていただいたと思います。

10ページからは、保護者のアンケートの結果です。質問である「小中一貫校となるまでのおよそ10年間の誠道小学校のあり方について」では、1から4の項目について意見をいただいております。回答数は41です。1番の「今のまま存続を希望する」で多いのは、やはり「少人数ならではの教育がとてもいい」という所に納得されているという意見があります。2番の

「他の小学校との統合」では、「人数が多い方が社会性は育つのではないか」という意見がありました。3番の「校区拡大」では、基本的には今の少人数の良さを認めながら「もう少し人数が増えた方がいいのではないか」という意見多いように感じております。「近くの隣接する地域からの通学ということもあるのではないか」「校区割も考えてみてはどうか」という意見がありました。「その他」ではいろいろな意見がありましたけれども、「きめ細かな教育には賛成であるけれども、今後どうなるのだろうか」という不安感があったり、「誠道町の街の分譲地の問題」とか、「これからの小中一貫校のプランを示してほしい」という意見がありました。ご意見やアイデアの中では、「第二中で一緒にしてもらおう」という意見もありましたし、「10年後に一斉に小中一貫になった方がいいのではないか」という意見もあるようです。PTAの方も、率直に意見を書き込んでいるのではないかと感じているところです。

戻りまして、資料の1～3ページにつきまして、教育委員会の方で参観等をして、まとめたものであります。まず、「誠道小学校の現状と課題」としてまとめさせていただいたところですが、特に教育内容や教育課程を中心に見ていきました。児童数はそこにあるように男女別で示しています。2番の「校長先生が掲げておられる学校経営方針」ですが、特に教育課程に関わる取組については、問題解決型あるいは話し合う場の設定等これからの「主体的で対話的な深い学び」を意識された授業改革というところをしっかりと挙げておられます。また、少人数を生かした取組としては、ホワイトボードの活用や情報機器の活用、対話的な場の設定を心がけておられます。教科担任制については、3年生以上に導入して教師の得意分野を生かし、いろんな先生との関わりを作るという特色ある取組をされておられます。3番の「少人数の良さ」については、繰り返し出てきていますけれども、「教師の目がよく届いて授業も集中して取り組んでいる」様子が見られますし、「個別の支援や評価がやりやすい」「10人前後の学級であっても3～4グループを作って協働的に学んでいる」様子も見られました。4番の「少人数の課題」としては、「教師と児童が1対1の場面になりやすい」「『先生、…ですか?』という教師への質問が多い」というところが見られました。細かく手が入る分、そのようなところがあるのではないかと思います。複式学級の様子も見ましたが、実際には複式を解消して指導はされていますが、少し難しさがあるのではないかと思います。6人とか7人で学び合っていくというところでは、まだまだ指導について研究していかななくてはならないと思いました。5番目の「工夫」については、ホワイトボードが使われたりタブレットが使われたりして、グループ活動をしているというところは工夫として見られました。6番でまとめとして書いておりますが、校長先生のリーダーシップのもとで少人数をいかした指導をしっかりと取り組んでおられるということがわかりました。個別のところによく行き届いているというところもありますが、教師に依存的な場面があるのではないかと思います。3ページに写真を載せておりますけれども、少ないながらもグループ活動を取り入れたり、タブレットを使って実験を録画してまとめたり、ホワイトボードに集まりながら学習する様子から、しっかりと学び合うというところの工夫をされていると思いました。ただ、10名程度でもグループはできますが、これが6年間続くという環境を考えたときに、どうなのだろうかと思います。1クラス3班・4班という組み合わせというのは、年間で変わっていくとしても、これが6年間続いていくところでの難しさがあるのではないかと思います。この子たちをどのように育てようかというビジョンがないといけないのだろうと考えます。実技教科では、一人ひとりの支援というのが十分でき、技術の習得もしやすいということがあります。しかし、多人数にできないという制限があ

りますので、多人数で取り組めないという課題があると考えます。むしろ、実技教科の方に課題が多いのではないかと思います。もっとも課題があるのは、3・4年生の複式学級ではないかと思ひます。現段階では、3・4年で複式をしています、実質的には複式を解消して単学年の形にしてやっていますが、6人・7人での学習のやり方は難しさがあると思ひます。一緒にやるとしても、直接指導や間接指導、ワタリ（複式指導の手法）というやり方を考えないといけないですが、これは非常に研究していく余地があるのではないかと思ひます。総じて、非常に工夫をされた学習の指導がされていて、研修を重ねて実践していけば効果も期待できるだろうと思ひました。しかし、10名以上の人数がある方が望ましいのではないかと思ひます。単学年での指導で、グループ学習ができたりする環境が必要ではないかと感じたところ。いろいろな面から申しましたが、これらを見ていただき意見を出して議論をしていただきたいと思ひます。

#### 4 審議

(会長) 参考までにですが、先ほど出ていました学テは毎年の6年生の4月に実施したものであるということです。10人くらい的人数ですので、パーセンテージを出すと11.1%とか22.2%という数字になってきます。一人のウエイトが大きくなるということになります。このデータだけでなく、ご覧いただいた中でご意見ご感想等がありましたらお願いいたします。今日は、このデータの上で議論するということになります。

(委員) 去年の11月にあった誠道小学校での保護者との懇談会に出席しました。3月には学校公開日がありましたので、行かせていただきました。先日の6月の一斉公開日にはいけなかったのですが、ここにまとめられていることは非常によくまとめられていると思ひました。保護者が一番心配しておられるのは、「一貫校にするためのこの先10年間をどうしてくれるのだ」ということだと思ひます。それを考えていかななくてはいけないだろうと思ひます。どのようにするかという細かい部分は、これから先に検討するとして、この間学んだ子供たちが「損じゃなかった。行ってよかった」ということに結果的になるような教育をするように考えていかななくてはならないだろうと思ひています。子どもたちの事が一番大事なことですから、その辺をどうすればよいのかということをもきめ細かく検討する必要があるかもしれませんが、そのことをまず一番に考えることだと思ひますので、そのような議論をこれから進めていくべきでないかと思ひています。

(会長) ありがとうございます。全体的に進むべき方向性についてのご意見をいただきました。他にはいかがでしょうか。

(委員) 前回の審議会で自分が非常に衝撃を受けたのは、人数を見ると誠道小と余子小が一緒になったら中浜小と人数のバランスが丁度良いことになるということ。会長さんが言われたように、市内にいくつも学校があるから「ここがなくなったら、他に小学校はないという環境ではない」という話をされて、そのような話がとても印象に残って、自分なりにシミュレーションをしてみました。もしも、誠道小が余子小と一緒になったらということをもイメージしてみると、以前保護者の方の体験談で聞いた小学校が合併したときの話で、子どもたちの意識の中に勝ち組・負け組という気持ちが出てくるということをも聞いたことが思い出されました。また、「なぜ余子小に行かなくてはならないのか。誠道小の方が新しいじゃないのか」という疑問もあります。「地元老人養護施設との交流もあつたりとかいいところがあるではないか」と思ったり、余子

小に行ってしまったら「名称は余子小学校なのか」と思ってしまったたり、「潔く第二小学校と新しく名前を変えてみたらどうだろうか」と色々想像してみたりしていました。しかし、学校だけでなく誠道町という街や公民館の問題などが、大きく変わっていくので、ただ小学校単位の問題ではないということを考えたりしました。誠道小の保護者や先生は「今、人数が足りないから何とかしてください」と言っているわけではないし、存続の声の方が多い。そういうことを考えたときに、「人数が少ないからといって安易に合併すべきではない」と思ったりして、そのあたりも疑問に思ったりしました。保護者の意見を読ませていただいて思うのに、誠道小という観点ではなくて私たちが何を指そうとしているのか。小中一貫校を作るという中間答申がまとまったと思うのですが、数年先として小中一貫校ができるという時点で7つの小学校が廃校になるときに新築・増築するところに行く、それはどのようにやっていくのだろうかと考えてもイメージができていません。そういう全体的なことをもう少し考えていないと、誠道小学校だけを見て「メリットがある、デメリットがある」ということは分かっていることですので、全体的なことを考えないと答えが出ないと自分としては考えています。コミュニティ・スクール（以後「CS」）を作るという教育委員会の考えがある中で、一応「まずは現在の施設のまま、小中一貫教育を実施していきましょう」ということが第1回の資料に載っているのですが、これは小中一貫校ができるまでの話なのだろうと思ったりしながら、いろいろなことが一緒になって、どんなふうに移行していくのだろうかということを自分なりにもっと整理して具体的なイメージができたかと考えているところです。

(会長)ありがとうございます。率直なところをお話していただきました。他にいかがでしょうか。時々、「この議論をなぜしているのか」とわからなくなる時があります。そのために、わかりやすい発言をしていただきたいと思っています。要するに問題は二つ、一つは「このままで良いのか、悪いのか」ということ。で、このままで良くないとしたら「なぜ?」、このままで良いとしたら「なぜ?」。そして、私は境港の市民ではないですので、住民の感情とかこれまでの歴史やこれまでの経緯などを取り払って、客観的に普通に考えるとこの状況は統廃合の対象にするか校区割を変えるかのどちらかだと思います。なぜなら、この地域に3つの小学校があることの意味、しかも一つはごく小規模であるということの意味は積極的には考えられない。例えば、山奥で谷に隔てられていて、「ここをなくしたら、バスを走らせて遠くの学校に行かせなくてはならない」というような状況ではない。それからまた、「何年か待てばまた人がどんどん増えます」という話でもなさそうです。普通に考えれば、税金をどのように使うかということ公教育として考えれば、当然ながら「統廃合の対象」とするか「校区割を変えて小学校を2つ態勢でいこう」と考えるのが常識的な判断だと思います。「そうしよう」と言っているわけではなくて、普通に何も知らない人がこのデータを見たら、おそらくそう思うと思います。で、他の選択肢があるし、平地の学校ですからそのことは可能です。行ってみれば、教育的にすごく特殊な状況です。それは、他の学校は学年2クラスあるのに、ごく小規模の6人・8人だという人数を一学年で、場合によって複式が2学級できる状況を「どうしてとっておかなくてはならないのか」ということです。その積極的な理由を教えてほしい、教育的な理由を教えてほしい。もしも、そこに何かがあるのであれば、それは境港市の皆さんが「この極小規模のこの小学校が、教育的な良さとか、メリットとかがあるから生かすようにしましょう」と皆で言わなくてははいけないでしょう。そのことが、「言えますか」ということが、境港市の住人でない者として率直なところです。もちろん、今までできてきた経緯とか住民の方がそれぞ

れの思いを持っているとかということは、分かっています。ただ、教育論として考えるのであれば、この特殊な状況の小学校があるということの意味を皆さんがどう考えるかということが問われているのだと思います。確かに保護者の方が言われるように「教室で丁寧にやっている」と思います。今日のホームページにも、「5年生は最高の授業だった。一人ひとりにボランティアの方が横について、参加してもらって、一人ひとりを大切に丁寧にできる。良いところですね」とコメントが書いてあり、私もそう思います。「それだけのいいところがある」ということでやっていくのであれば、それなりの覚悟で取り組まないと、「このまま自然にほっておいても良い授業ができるということは言えない状況」になっています。先ほどありましたが、さすがに10人はいないと教育的には厳しいでしょう。あとから聞こうか聞かまいかと思ったのですが、学テですが、確かに10人程度ですから個人的な状況が反映されやすいということはよく分かります。ただ聞きたいのは、たまに良い結果だった年に、「個人的に特に高い子がいたからそのようなことが起こった」のか、また「全国や県、境港市の平均よりも悪い年は個人的に非常に低い子がたまたまいた」のかという話は非常に大きいです。そのことを考えたときに、私たちは何を議論しなくてはならないかということは、一定程度明らかになると思います。大変厳しいというか鋭角的に話をさせていただきましたが、客観的に見るとそういうこと事になると思います。もちろん住んでいる方は別の議論をしなくてはならないということは分かっています。皆さんが何を議論しなくてはいけないかについて、少し整理させていただきました。

(委員) 前回データを見て非常に複雑な思いになりました。「人数ありきではない」ということを色々考えました。この前の6月5日には誠道小学校に行きまして、校長先生といろいろな話をさせていただきましたが、今回のようなデータが出るとは思いませんでした。いみじくも会長が最初のあいさつで名前をあげられえた日野郡の小学校に勤務させていただいて、非常にごく小規模校でしたが、学力もかなり高い学校です。今回の資料には地域住民の声はないのですが、校長先生と話をしているときに「公民館長さんも統合については苦言を呈している」という話を少し聞きました。私自身が日南町の小学校の1校統合に関わった経験から言うと、境港の住民でない私自身の気持ちからすると「誠道小を数の事を考えて統合する」とは言うことはできません。たとえば10数年後に小中一貫校を行政サイドで動くのであれば、2回も統合を行うこととなります。今の現状で行くと、吸収合併的なことしか考えられない。そうすると地域住民の方は相当憤慨されるのではないかと思います。日南町の場合は、最初は吸収合併みたいな声が上がったのですが、色々な保護者や地域の皆さんと総合的に話し合っ、将来的なビジョンも含めて、中学校の隣に新校舎を建てて併設型ではあるけども将来的には小中一貫教育を進めていこうとなりました。あれから7年間たちますが、なかなか小中一貫教育にはなっていません。この前の資料でCSの導入というのはとても賛成です。CSイコール小中一貫かという違いです。その辺を考えたときに、会長から話もありましたが、我々が審議の中で児童数の推移などを見ても10数年後以降でないと動けないという現状から、誠道小だけをもってどこかに合併するというのはどうなのだろうかと思います。鳥取市では小さな小学校がありますが、少人数だからこそできる教育というのがたくさんあって、そういう所に「うちの子を入れたい」という保護者が他校区にいらっしゃるのではないかと思います。大勢の中では、なかなか集団生活になじめない児童は少人数の中で取り組んでいくことができるように校区外申請をすれば可能ではないかと思います。校長先生も言っておられましたし私もそう思います。

「一度来てみてください。こんなに素晴らしい教育ができています」と言えるように頑張っておっしゃっていただくのが一番だと思います。10数年後に第一中学校区、第二中学校区、第三中学校区で小中一貫校を目指すのであれば、そのままの「存続」の方がいいのではないかと考えています。

(会長) 今のは、言い方は悪いですが、たまたま小規模になった学校を、「そこに価値がある」としてそのまま保存するということだと思います。そこで、「それでいいのか」という話です。先ほどおっしゃったように複式というのは非常に難しいということをご存じだと思います。一生懸命という所とは別に、学力とどう関係してくるのかということとは当然考えなくてはなりません。それは教育を組み立てる側の責任です。保護者の方は、そのところはあまりよくお分かりにはならないと思います。そのところを考え、「このままで良い」とすれば、そこにどんな手入れをしていく必要があるのかということをやっつけていかないと、このまま他の小学校と同じ条件で運用するということでは、「小規模だからできます」ということにはなりません。その辺の問題をどのようにクリアしていくかということです。

(委員) 誠道小の保護者のアンケートを見ると「存続」が27、「校区拡大」が8。41家庭の中の35が「誠道小を残したい」ということです。保護者の全体的な考えとしては、「存続」ということだと思います。地域の方にしても、ないよりもあった方が地域の活性化という意味合いもあると思いますので、「あったほうが良い」と考えていると思います。そう考えますと、地域と保護者の感情も考えて、そして少人数を解消するという意味で「校区拡大」というのがベターだと思っています。「校区拡大」となると影響の出る地域の方ということも感情が出てくると思いますので、そのところは教育委員会の大きなパワーがいると思いますが、それが解決の方法なのではないかと私の中には芽生えています。

(会長) 校区を上手に割らないと小規模の良さはなくなります。小規模を守るような方向に割り直すということですね。

(委員) そうですね。最小限の校区拡大。

(会長) 小規模の良さというのは何人くらいまでを考えているのでしょうか。保護者の方も「今はい」と言っておられるのですが、だんだん増えていくことになったときに「最初と話が違う」となったときには、どうすればいいのでしょうか。校区割というのは、それだけ難しさがあると思います。私は、あくまでも教育の専門家としてここに座らせていただいているので、冒頭に申しあげたように、住民の方の感情やこれまでの経緯を考えずに発言しています。皆さんの発言は、基本的には地域住民の思いの話をされています。地域住民の思いの話で議論するのであれば、今日のようなデータを出してもらって議論することはほとんどないということになります。そうであれば、「みんながそういっているのだから、今のままで行きましょう」というのが一番波風が立ちません。そういう議論であるのなら、みんなが何回も集まって議論する必要はないということになります。それで皆さんが「よい」とお考えであれば、私は教育の専門家としてどうこういう筋合いではないということになります。教育委員会も、なぜこの資料をここに載せられたのかということですが、課題があると思ったから載せられたのだと思います。そのあたりを皆さんがどう考えるかだと思います。「載せてはみたけども、今これをいじると皆が怒るからやめときましょう」という話なら、やらない方がいいでしょう。

(委員) 参考になるかどうかわからないのですが、境港市ではないですが学習支援員をしたことがあり、複式学級に入らせていただくことがあって、5・6年生でしたがクラスに合わせて8人く



らいで、5年生と6年生では習うことが全然違います。ですが、教室は一つで、前の黒板は6年生の国語で、後ろの黒板が5年生の国語だったりして、先生は一人です。5年生を教えている間は、6年生は自習をしたり話し合いをしたり、プリント学習をしたりです。それが終わったら一人の先生が、6年生の方に来て授業をして、その間は5年生が自習というような形でした。授業の組み立ては普通の小学校と全く違うのが衝撃だったのですが、確かに子どもたちは分からないことがあると先生が向こうにいても「先生ちょっとすいません…」と言って、なかなか授業も進まないようで、問題がすごくあると感じました。その学校はそのまま残っているのですが、その学校と誠道小学校は違うので比べてはいけなと思います、学テの結果とかを他の小学校と比べると、学ぶ意欲が育ちにくいというのはあるのかもしれないと思いました。それが、学テの結果とかに表れているのかもしれないと感じながら見ました。私の中にも二つの気持ちがあって、保護者のアンケートにある「小中一貫校になるのであれば10数年後に一斉に合併する」のが誰かが我慢するわけではないので、地域住民や保護者を含め納得するのではないかという気持ち。それと、会長が言われたように、今通っている誠道小の子どもたちの教育を考えたときに、10数年間をこのままで良いのかを考えてしまいます。どちらがいいのか本当に悩んでいるのですが、複式というのは難しいと思います。

(会長) 単式の学年もあるのですが、このままいくと複式の学年はずっと上がっていきますので、この子たちに何もせずに行くというわけではないと思うので、もし少人数の良さでこのままいくのであれば、「たまたまなったので、たまたま皆がんばれ」ではいけないので少人数を支える仕組みを作らないといけなと思います。良いところばかりを見るのは簡単だけでも、6年間ずっと問題があるところの「蓄積する効果」はあると思いますので、そこには手を打たなくてはいけないと思います。少人数がだめだといっているわけではなくて、少人数でいくなら行くための手当てをしなくてはならないといっているわけです。

(委員) 皆さんの話を聞いたりして、頭が混乱してきているのですが、昨年度は小規模校のデメリットの方に意識がいて、「これではいけない」と思っていました。色々考えて、消去法で「余子小との統合」という考えに至ったのです。今回いただいた資料を見させていただいて、昨年度の人権教育参観日に参加したり今年度の一斉公開日に参加し授業の様子を参観したりして自分が思った印象の通りで、すごく理解ができて共感ができました。教職員のアンケートでは課題が率直に書いてあって、それを克服するためにしっかり工夫してやっていこうという意欲も感じました。私のモヤモヤしていたところが、「やっぱりこれだ」と思ったのは、小規模校を保証する意見が出ていますけれども、資料にありましたけども私は第二中校区に限って学校選択制を取り入れながら誠道小を存続して、小中一貫校の下準備をしていくという方向性・可能性もあるのではないかという考えに変わってきています。今、皆さんや会長の意見を伺って、「学校選択制というのが複式解消の決定打になるのかどうか」とも思います。「ふたを開けてみないとわからない」ではいけないでしょう。「小中一貫校の下準備」と一言でいうのですが、これが膨大なエネルギーと時間が必要でしょう。「そんな一言でいえるような内容ではない」という不安感があって、余子小との統合は吸収合併というようなことになるのでしょうか、それに対するエネルギーと時間も膨大でしょう。小中一貫校につながる「存続」の方がいいのではないかと…といった、色々揺れ動いています。今の段階ではこのような状況です。

(会長) ありがとうございます。私は揺れ動かすのが役割ですので、他にいかがでしょうか。

(委員) 前回の時でもですが、先ほどの発言と同じで、私も色々思いめぐらせています。小中一貫校

についてですが、設置までが5年先とか短ければ、そこまでは我慢して、一斉にやっていくのがいいと思うのですが。10数年先というのであれば、どんどん人数が減っていくとすると「今通っている子どもたちを何とかしなくてはいけない」と思います。保護者のアンケートの「その他」のところの2つ目にある「そこに住みたくても今の市営・県営住宅は転居せざるを得ない」とか「そこに新居を構えようと思っても、そこにできないから夕日ヶ丘に新居を構えた」と書いてあります。そうすると、どんどん出てしまう可能性が大きいのであれば、10数年後までの間はそこに住める状況を、ある程度定着して子どもたちが少なくなる形に残すのも一つの手なのではないかと思えます。もちろん、会長が言われたように小規模ということを踏まえて色々な手立てを含めて10数年後まで「存続」というのは一つの方向性だと今思っています。

(会長) もともと細かい数字を気にしないのですが、そもそも母数が少ないから細かい数字を気にしなくてはならないと思っています。去年いただいたデータだと入ってくる人数は8名だと思えますが、今年6名です。この理由は聞かないといけないと思うのですが。

(事務局) やはり家を建てられたりして転居された家庭があるということです。逆に転入してきたご家庭もありました。本当は、5名の入学の予定だったのが、1名の転入がありました。

(会長) 私の方でちゃんと見ておかないといけないと思った理由は、学テの状況について、ここまで低いとは思わなかったということです。これは、専門家としてはショックです。詳しくみると、国語Aは平成26年以降は大丈夫かというところではありません。国語Bになると平成25年以降は全体として厳しい状況が続いていると言わなくてはなりません。算数Aでは、下の解説で「平成24年度～26年度は、全国平均とほぼ同じか上であったが」となっていますが、ここは平成25年までです。平成26年ではありません。「平成27年度以降全国平均より下がってきている」となっていますが、平成26年度以降下がっています。この下がり方は、一桁違います。A問題というのは、基礎的な計算問題で、応用問題ではないです。B問題がいわゆる思考力を問われる問題です。これは平成25年度以降一貫して厳しい状況です。学力が上がるだけが教育の良さではないので、他に色々なメリットが子どもたちにあるということは教育の専門家として理解しているところです。しかし、「このことに手を当てなくてよい」という話にはならないと思います。「一人ひとり先生に面倒見てもらって、丁寧に扱っていただいて、一人ひとりに存在感がある」という非常に良い教育の面はあるけど、一方でこのことで「この子たちの中学校・高校などの生活でどういう影響があるか」を、データが出ているのに「そこを議論しない」というのはどうだろうか、専門家としては申し上げます。それから、6ページの学テの質問紙の結果ですが、先ほど言ったように一人の結果で11.1%か22.2%かということがありますから、9人の中の一人、10人の中の二人ですけど、その問題は小さくはないです。「学校に行くのは楽しいと思いますか」とか「自分には、良いところがあると思いますか」とか「学級みんなで協力して何かをやり遂げて、うれしかったことがありますか」ということに、ノーを付ける子が毎年一人ずついる、年によって二人いるというのは、「少人数の良さが出ているといえますか」と言ったときに、私は非常に厳しい値だと思います。何百人いる学校の11%だったら、「あるかな」と思いますが、皆さんが言っている「少人数で良い教育ができています」と言っているところで、否定的な答えの子が「一人います」「二人います」というのは案外厳しい話だということを教育相談の専門家としては申し上げたい。学校側はそこに手を当ててないわけではないと思っています。先生方はそのことに気づいていて、その子をフ

オローしていると思います。それが少人数の良さであるということも知っています。しかし、そこにノーを付けてしまう子がいる以上は、「このままで良いとは言えない」ということです。そのデータを今日は出していただいで、「このままで良いという議論はなし」であるということは申し上げたい。他と比べれば明らかに小規模校である学校をそのまま残していいのであれば、そこに「こんな小規模校になってしまって、他と比べれば特殊な学校で、他に行く場所がないわけではなく、行く場所のある平地の学校をその形で残すのであれば、そこに相当な手を加えないと、このままでは危ないのではないですか」というのが、ここに座っている人間の役割です。その上で皆さんが様々なことをお考えになって、議論していくことは必要だと思います。一つの考え方として、「この学校が小規模のまま教育的な手立てだけして教育的な条件を生かしながら教育の質を高めていこう」という学校が境港市に1校あってもよいと皆さんが考える。また、「さすがにこのままだと厳しいから少し人数が増える手を考えないといけないから校区割くらいは動かしたり自由にしたりすることが必要だ」という議論があるかもしれません。これまでの皆さんのおよその意見を見ると、そのようになります。その辺について、ご意見はいかがでしょう。

(委員) 日頃感じている誠道小の子どもたちの様子ですけども、学習についての小規模のメリット・デメリットについていくと、対話的なことのチャンスが少なかったりしますし、子どもたちは多様な考え多様な動きに刺激を受けて次なる意欲が出てくると思います。そういうチャンスが少ないということは不利になってくると思います。あとは、狭い部分での話になりますけども、小学校体育連盟の仕事もしていますので、陸上とか水泳の中でリレーがあるのですが、誠道小は4人の選手を確保できていません。陸上の場合は走ればいいのですが、水泳の場合は50m泳がないと種目が成立しませんので、その中で数年前は「泳げなくても良い」とか「学年をまたいでチームを組む」とかのオープン参加という形で出てきていました。その時の応援の様子はどうかというと、非常に応援テントの児童が少ないので、さびしいという状況でしたので、他の6校から声援を受けて泳いでいるという様子です。今年も水泳大会の準備会をしていたのですが、「誠道小は保護者の席をテントの近く」という話が出ていました。というのも、誠道小は応援のテントに児童が少ないので、保護者の席を近くに置いたらいいのではないかとということです。そのようなことを考えると、地域の方や保護者の方の気持ちもあると思いますが、子ども達は正直どのように感じているのかと考えたときに、子どもらのアンケートがあるわけではないですけども、決して今の状況を満足しているということは少ないのではないだろうかと思ったりします。そう考えると、この規模で続けていくというのは、少し厳しいのではないかと思います。

(会長) 資料の8ページにも同様なことが出ていますが、胸が苦しくなりながら拝見していました。大人の論理ではなくて、毎日暮らしている子どもたちが他の条件を持っている子どもたちと接しているということも考えながら議論しないといけないということだと思います。

(委員) 地域と学校という関係を非常に大事に考えたいと思っています。6ページの学テのデータについてですが、「地域の事が好きですか」「地域の行事に参加しますか」などの地域の事についての質問が出ていないですが、うちの学校だとその部分に非常に大きな関心を持っています。これからますます地域全体で見ていこうという方向に境港市は向かっていきますけども、その中で誠道小の子ども達が少ない人数のメリットとの一つとして地域と関わるということが享受できているのだろうかと思えます。「自分の地域に対する誇りを持てる」などはどうなのだと

ろうかと思います。

(会長) 学テの質問には、そういう地域に関する質問もあるのですが、今回はそのことは載せてはいないということだと思います。地域というのは子供が決めるのではなくて、大人が決めてしまっているものなので、子どもはそれが地域だと思っているということです。もう一つは、その地域と結びつきながら、そこに育てられながら、もう少し大きな世界に出ていく。そういうことも考えてやらなくてはならないと思います。

(委員) 今日は、色々な話を会長や皆さんからお聞きしたわけですが、どうしたものかと考えます。一斉公開日には誠道小に行かせていただきました。2年生の児童にばったり会って、見たことのないお父ちゃんが来たということで、「どっからきたの」とか聞かれまして、「今日は上道の方から来たの」とか話をしました。で、「学校たのしい？」と聞いたところ、「うん、楽しいよ」と言っていました。これまでの議論の中にもありましたが、教育も工夫をされているところがありました。そのあと、中浜小や余子小にも行かせていただきました。中浜小は境港の中では一番大きな小学校で、誠道小が一番小さな学校ということで、両極端なところを見させていただきました、一番危惧するところは、会長が少し言われましたが、誠道小の子が「井の中の蛙」になりはしないかということです。同じホワイトボードを使ってみんなが集まってワールドカフェ方式のように皆で書きながら学び合っているスタイルをとっておられましたが、中浜小は白地図を教室いっぱい大きく広げてみんなが集まってグループに分かれて、色々な話をワイワイしていました。極端な違いというのを拝見させていただきました。子どもたちは地域を選べないという話もありましたが、そういうところも考えて、もっとたくさんの人たちや子ども達と触れ合う機会というものが、結果的に凶らずも奪われているということになってはいないかということ少し気にしたところです。「井の中の蛙」としたのも、学テの結果ということもあります。以前の会でもお話しさせていただきましたが、一番大事なのが「学校は子ども達にとって学ぶ場である」ということです。この大前提の所が、崩れてしまっているような危機が迫っているのではないかと感じたところです。

(会長) 子ども達の育ちとか学習の様子をどのように考えるかということですが、子ども達はそれしか知らないで、その中で力を発揮する。大人数の学校に負けずに色々な教材や仕組みを使って取り組んで、様々な工夫をしていくわけです。私も小規模校をたくさん見てきているので分かります。私が小規模校を見てきた理由は、「そこからその学校がなくなるとその地域は立ち行かなくなる」というところで、そこから学校が消えるということは大問題なことです。ここが小問題というわけではありません。だけど、「他に選択肢があるかないか」ということにおいては、明らかにここには選択肢があります。「あるけど、それを残す」という議論を皆さんがするのであれば、「それなりの覚悟が要ります」ということです。小規模校や少人数の良さがあることは理解していますが、この条件の中でこの小規模校がなければならないという部分は、教育論から言えば少し難しい。住民感情論とかこれまでの経緯から「それはそうなんだ」と言われれば、それは全然別の次元での議論ということになります。それはそれで、結構だと思います。ですけど、教育論から「このままでなければならない」という結論を出すのは、私にとっては少し難しいです。例えば、隠岐島前高校のような例があって、私も深く関わっているところもあって、「島の学校が消えてしまう。何とかしたい。あの少人数を何とかいいものに」という努力をしていくという意味はよく理解しています。それがどううまくいって、うまくいっていないかも知っています。ですが、「その例とこの例は一緒ですか」ということは

申し上げたい。今日はあえて、「私たちが議論していることは何なんでしょう」と申し上げたのは、そういうことです。偶然こうなってしまった状況に、教育的なメリットを見つけることは、見つけられますけど、「それだからいいのだ」というのに結びつけるのは少し難しい。むしろ、それよりもリスクの方が高いということをデータも示しているし、今後の学習指導要領の中でそうでしょうし、現場の先生方はそのことを感じておられると思います。ただ、それでも続けていくということを皆さんがおっしゃるのであれば、それはそれなりの手立てが入ります。それには二つのやり方がある、一つは教育条件を何とか支えるために、「ICTがうまく使えるようになる」とか「先生方も一緒に複式教育の研修に出かけていく」とか「人数的には無理であるけども、市単独で加配を付ける」などの方法をとる必要があると思います。あるいは、もう少し違う集団での取り組みをするなどの様々な工夫も必要な手立てだと思います。もう一つの考え方は、「小規模をこのままにしておくのでは、0歳児の数とかを見ると危ないので、最低は複式が避けられるくらい的人数規模になるように線引きを変えませんか」という話は可能性としてはあると思います。残すという議論をするなら、何らかの工夫が入りますが、今二通りの話をしました。そのあたりを、今後どうしたらいいだろうかとということが、今日皆さん方が導かれた話として整理できると思います。もう少し時間がありますが、どうでしょうか。

(委員) 明るいイメージを持ちたいというのがありまして、余子小と誠道小があってどちらかの小学校に行くというのではなくて、第二中の隣に新校舎を建てて「第二小学校」という形で一部が小中一貫校であるという学校が境港市に誕生するというイメージはできないのかと思います。私は夕日ヶ丘なのですが、夕日ヶ丘の住民から見ても「うらやましい」と思えるようなイメージが持てるというと思います。余子校区とか誠道校区という地区の伝統は継承しつつ小学校だけが新しいビジョンの方に移行していくというのは可能なのではないかと思います。

(会長) どっちかがどっちかを吸収するというのではなくて、そういう明るいイメージで考えることができるのではないかとということだと思います。これまでも誠道小だけを第二中と一緒にするという話もありました。それも少し考えられると思いますが、生徒の数と児童の数を考えたときに、あの規模の所に小中一貫として一緒にして、教育的意味があるかどうかは少し難しいところがあるのではないかとと思います。三つの小学校が一つになって小中一貫をしていくというのは色々ところで統合の意味があるのではないかとと思います。色々な可能性があると思いますので、話を出すことは大事だと思います。

次回の議論ですけれども、今日出た案を事務局の方で少し整理していただいて、移行の可能性があったらどういうことが考えられるのかを議論していったらどうだろうかと思います。私は今日あえて、「このまま存続させていいのか」という議論をしました。それに対して、皆さんは「なんとか存続」という意見がかなりありました。「存続させるのであれば」という前提で、「条件を考えると、こういうことがいるのではないか」ということについて少し話をしてみました。存続の一つの考え方として、小学校の先行統合という考え方もあるのかもしれませんが。そのあたりの可能性を考えながら、皆さんと議論していきたいと思います。これ以上の新しい資料は出てこないと思っておりますので、教育のデータを積み上げて議論をするという方向と、これまでの地元の思いや皆さんの思いを大事にしていくという議論の方向性と二つあるので、そのどちらがいいかはわかりません。教育の専門家として言えることは、ほぼ申し上げてきましたので、その上で皆さんがどう考えられるのかということになります。他になければ、今日はこの辺で終わりたいと思います。

5 閉会

(事務局) 次回は7月28日で、会場はここ第一会議室です。今日は、どうもありがとうございました。

閉会 17時24分